

## 中国金銅仏雑感

松原三郎(実践女子大学名誉教授)

この「美のたより」も本号で丁度、百号を迎えたとのこと、しかも、十月には中国金銅仏の特別展が開催されるので、本稿では、当時の創立者として偉大な功績のあった故矢代幸雄先生に私が始めてお会いし、中国金銅仏の研究について色々御教示を頂いた話をまとめて置きたい。

いうまでもなく、矢代先生は西洋のみならず、東洋、更に細かくは中国の彫刻についても御造詣が深かったが、それはもはや三十年も前のことで、先生が某新聞社紙上の学芸欄に日本の古代彫刻の研究には中国古代彫刻研究が欠かせないことを強調され、せめて日本にある中国の金銅仏でも大小優劣を問わず徹底的に調査の必要があると記された直後であった。

たまたま私は格別の目的もなく館内を見学しているとき学芸員(現在の衛藤駿慶応大学教授)から館長がお呼びだという伝言があった。当時私は一度も先生に御挨拶したこともなく、その点やや奇異にさえ感じたともいえよう。

さて、一時間に及んだ話題は中国古代彫刻、とくに中国金銅仏に関してで、勿論、すべては若輩の私に対する先生からの調査研究上の御注意に尽きた。

以下、私自身の解釈をも加えて一応、要約すると、第一に中国の金銅仏の調査研究はなお今後に期待したいが、一般に作品の遺存が極めて少ないとされているのは大きな誤解で、広大な中国のこととて将来、その数が何処まで増えるかははかり知れない。まして遠からず日中の文化交流関係が促進されると、その研究事情は一変すると思う。一言では中国金銅仏の重要な特色は大量生産にあることで、しかも、それら無数の遺品をどれ一つも決して無視出来ないことで

ある。更に面倒なことは他の古美術にも増してあまりにも贋作の多いことで、いわゆる「にせもの」とよぶべき故意によるもののみではなく、後世のとくに明代の模作の多いことを注意された。

次に、そのような大量生産によりとくに中国全土の地域様式や形式の変遷がごく僅かな天才の出現によることなく、むしろ無名工人の集団化の流れにあること、換言すると、中国彫刻史の流れは点の結合ではなく面の交流といえよう。随って、中国金銅仏の歴史を叙述するに当たって、決して名品とよばれるものを度外視し得ない一面、常にその名品の生まれる背景となった無数の小品、及至は駄作すらも念頭に置かざるを得ない。この大きな矛盾を克服する点に中国金銅仏の論考のむつかしさがある。単に新発見の未発表作品とは言え、

金銅如意輪観音像 唐時代



中国金銅仏史上、何の意義もない作品を如何にも重要な様式上の意義を有するかの如く発表するのは却って彫刻史研究の進展を遅らせるに過ぎないのである。たとえ、単なる作品解説にしる中国金銅仏の資料紹介は十分の注意を払う必要があると言わねばならない。

さて、以上のような矢代先生の御教示を自分なりに理解して、私は中国の金銅仏研究で最も重要なことは作品の大小優劣にかかわらず、たとえ贋作たりともその詳細な形状を確実に記録することだと思ふ。勿論、写真の記憶があればいっそう十分である。もう十年も前のことだが、ある古美術商(中国の金石専門家ではない)から北魏の紀年のみを告げ、写真の提示もなくその真贋を問われた。しかも、これを購入した著名な文化人が私が拙著に掲載しながら、そ

同 背面 大和文華館蔵



れも記憶しないのかと批判されたと聞いて愕然としたことがある。

思えば、矢代先生にお目にかかって約三十年、今日では中国の金銅仏に対する関心もかなり深くなり、本館でも中国金銅仏だけの特別展を開くようになったのは極めて感慨深い。いま、展覧会に関連して矢代先生のとくに思い出となる館藏品の一例をとっては唐代の如意輪観音をあげたい。そもそも、この像はもともとはある著名な薬学の大家の所蔵によるもので、私もそのお宅に参上したことがあった。まず、中国の金銅仏の多量の所蔵に驚いたが、ただ遺憾ながらそのコレクションの推賞に値しないことは避け得なかった。ところが、ただ一点、これまで絶対に見られなかった唐代の金銅如意輪観音像を発見して大へんに驚いた。しかし乍ら、当時はそのような唐代の金銅如意輪観音像の遺存などは想像されず、雑誌にも掲載許可を得られなかった。かくて数年後、この像が大和文華館蔵となったこと、即ち、矢代先生がこの僅か十数センチの小像ながら、その重要性を認められたことに感激して、先生の教訓を生かすことが出来たことをよろこんだ。

現在、この唐代如意輪観音像は今日もなお世界的な珍品として有名だが、今もこの像に接するたびに矢代先生にお会いして特に中国金銅仏についての種々の御教示を賜ったことを想起し、「中国の金銅仏」展開催に当たって一文を草する次第である。

(この度の「中国の金銅仏」展の実現に際して、中国仏像研究の権威、松原先生にお世話になり、ここに貴重な一文を頂きました。尚、文中の大和文華館所蔵如意輪観音像について、先生が『大和文華』64号にお書きなっております。)

季刊 美のたより No.100

平成4年8月13日

発行 大和文華館